

三島由紀夫『暁の寺』

—— 謎めいた転生者と行為者になろうとした認識者 ——

田中 あゆみ

第一章「転」を担う物語の問題提起

どの物語も必ず起承転結という形を持って成立する。

長編小説というものは、作品によって巻数こそは変わるものの、この起承転結の形だけは変わらない。この起承転結という諺をもっともわかりやすく体現している長編小説が三島由紀夫のライフワークであり、最後の長編小説となった『豊饒の海』といっても過言ではない。『豊饒の海』の本筋は、一筋縄ではいかないものの巻数が全四巻と綺麗に分かれているため、どの時点が起承転結なのかは明確だからだ。

『豊饒の海』では、主人公である松枝清顕と幼馴染の伯爵令嬢の綾倉聡子の道ならぬ恋とその破局を書いた『春の雪』が起にあたり、清顕の転生した人物にあたる右翼少年飯沼勲の決起から自殺までを書いた『奔馬』が承にあたる作品である。そして、二巻続けて狂言回しとして登場していた清顕の友人である本多重那が主人公にまわり清顕と勲の転生した人物であるジャントラバー姫（ジン・ジャン）への報われぬ片恋の破局から姫の死までを書いた『暁の寺』が転、本多が追いかけてきた輪廻

転生の決着が着く『天人五衰』が結にあたり、物語は結末を迎える。本稿で取り上げるのはこの起承転結の転にあたる『暁の寺』である。

『暁の寺』の執筆期間は第一部が一九六八年二月から一九六九年四月まで、第二部は一九七〇年二月までである。三島の長編小説には二部構成の作品は『禁色』、『鏡子の家』などがあるが、『豊饒の海』全体ではこの『暁の寺』が唯一の二部構成で構成されている。二部構成という構成だけでなく、『暁の寺』は、『春の雪』、『奔馬』の前二巻とは全く異なる。

第一に、作品における主人公が転生した人間ではない。『春の雪』では松枝清顕、『奔馬』では清顕の転生後の飯沼勲と前半二巻においては主人公は、もとは同じ魂の人物であった。しかし、『暁の寺』では今までの作品の狂言回しを担当していた本多が主人公の役目に廻る。これまでの前半二巻においては、清顕、勲といった主役側の視点と本多の主役を見守る傍観者側の視点で融合した形で物語は展開したが、本作は本多の視点のみ展開される。

第二に松枝清顕、飯沼勲と男性の転生の系譜が続いたところにジン・ジャン（以後はこの呼び方で統一する）という女の転生が登場すること

だ。このジン・ジャンこそ前巻で自刃した飯沼勲が転生した人物なので、ジン・ジャンは、松枝清顕、飯沼勲と続いてきた転生の中の初めての女性の転生として登場する。本多繁邦がタイを訪れた際に、七歳のジン・ジャンは本多に前巻で自決した飯沼勲の生まれ変わりとな乗りに出るが、戦後に再会したジン・ジャンにはその記憶はなかった。また、ジン・ジャンは何事においても自分から行動することはなく何事にも受動的な点が今までの転生とは異なる。

第三に、主人公にまわった本多繁邦の人物描写そのものにおいてである。『春の雪』、『奔馬』とはまるで異なる歪な性質が少しずつ表に出てくる。前半二巻においての本多は、主人公である松枝清顕、飯沼勲の生き方を傍観する立場の理性的な人物として描かれてきたが、本作にて主人公の座を勲から譲り受けた本多は、今までは対照的に享乐的で覗きという偏執な趣味に興じるようになる。清顕と勲という今までの主人公たちにおいては物語が進むにつれアイデンティティの崩壊と引き換えに滅び故の美が存在したが、『暁の寺』においては物語が進むにつれ本多という人間の歪みが作品世界を侵食していく。これが『暁の寺』とこれまでの二巻との最大の相違である。

一方で『暁の寺』という作品においての先行研究は、『豊饒の海』四部作の研究論の一部として扱われているのが多数である。作品単体の先行研究は『春の雪』、『奔馬』よりもさらに輪をかけて少ないのが現状だ。

大森郁之助は、『ジン・ジャンと『暁の寺』から登場する本多の友人久松慶子のレズビアニズムの関係について着目し、『春子』と比較した上で、三島は、「少なくとも経ている春子のレズビアン・ラヴにのみ正常な親近感を示した」とし、『暁の寺』では男が全く存在しない女だけの

世界を即物的に書いて終わっている点に同性愛のモチイフの断念放棄と一脈相通じるとしている。

田崎英明は、『豊饒の海』第三部の『暁の寺』はいささか特異な位置を占めるとし、その特異さは、語りの種差にあることに注目している。『豊饒の海』は基本的には語り手は二人の人物に同一化しているが、『暁の寺』では本多繁邦一人であることを指摘し、その理由をジン・ジャンは「見る」ことをめぐって戦いが繰り広げられる場所」であり、第一巻の『春の雪』の清顕と聡子、本多の聡子への想い、本多と清顕、飯沼と清顕、第二巻の『奔馬』の勲と楨子といったこれまでのさまざまな関係が折り畳まれていくと指摘した。

柴田勝二は、「世界解釈の小説」として構想された『豊饒の海』全四巻のなかにあつてとりわけその動機が強く滲出している作品である」として、「戦中と戦後の二つの時代的背景のなかに、死への情念の喪失を基調として差し出しながら、そこになお残存する彼岸への志向を、転生の主体が身にまとう距離の暗喩によって形象させた物語であった」と述べている。また、ジン・ジャンの示す変容には、『暁の寺』で縷述されるアーラヤ識は『金閣寺』の主人公が呪う平坦な「仏教的時間」を否定的に反転していく間の距離が投げ込まれていることについても指摘している。

武内佳代は、「ジン・ジャンと久松慶子の表象の特異性に目を向けることで、彼女たちのレズビアン関係がセクシュアリティの問題とは位相を異にして、戦後日本のナシヨナル・アイデンティティーを寓意的に表象しうる」と述べている。大森と同様にジン・ジャンと久松慶子のレズビアニズムを表象としながら、二人の同性愛は、「本多も戦後の現実的な時代性に回収されていくことを如実に物語っている」と作品が発表さ

れた当時の時代性にも着目した論となっている。

久保田裕子は、『暁の寺』において書かれたタイとインドのオリエンタリズムの破綻と作品が発表された当時の一九六〇年代の冷戦イデオロギーの視点から「暁の寺」に描かれた（アジア）をめぐる表象は、異文化体験を通して自己の変容を描くという表現の範型として継承され、その後の（戦後文学）の領域において、観光とセクシャリティを通してタイを描いたさまざまな文学テキストにも影響を与えている」とこれまでの唯識や同性愛から視野を広げている。

井上隆史は、『暁の寺』を「『豊饒の海』全四巻のなかで、読者にとっても最も親しみにくく読み辛い作品」と前置きを置いて、「『暁の寺』で扱われているのは、近代化の進展というものが世界各地にもたらすテーマであり、二一世紀の差し迫った課題でもある」と指摘し、それがもっとも顕著に現われたのが戦後の日本であったと「昭和」の時代の縮図を書ききった小説と作品を位置付けている。

これらの先行研究を総合すると、『暁の寺』における先行研究におけるメタファーは大きく分けて①ジン・ジャンと久松慶子のレズビアニズム、②アジアをめぐるオリエンタリズム、③時代性の三つに分類される。また、近年の先行研究はアジアに視野を広げた論と世界小説として論じられることが多い傾向にある。しかし、田崎が着目した「語りの種差」が本多繁邦ただ一人であることがもたらす特異さは『暁の寺』について考えていく上で必要不可欠である。

本稿は先の『奔馬』において飯沼勲から主人公の役目を譲り受け、「傍観者兼行為者」となった本多繁邦の行為者としての行方と恋の相手であるジン・ジャンという人物について注目していくことで二人の行為が作品にどのような影響を及ぼすことになったのかを考えていく。

第二章 謎めいた転生者

夢から読み取る伏線

『豊饒の海』四部作において初の女性の転生者であるジン・ジャンは、色々な点において特異性の多い人物として設定されている。

ジン・ジャンは『春の雪』に登場した清顕と本多のかつての学友パッタナデイド王子の末娘である。本名のジャントラパーは死に分かれた許婚の名前から付けられた。

『豊饒の海』第一部の昭和十六年においては五歳の子供として、『豊饒の海』第二部の昭和二十七年においては十八歳の美少女として登場する。

ジン・ジャンに転生する伏線は、『春の雪』で既に張られている。あの冬の朝、清顕は自分がシャムへ行っている夢を見る。その夢は「宝石をいっぱい鏤めた金の冠を戴いて」、部屋の中央の椅子に腰を掛けたまま、ジャオ・ピーがはめていた指環を眺めていると「そこに小さな愛らしい女の顔が浮かんでいる」のに気づくが、もう一度指環の石を覗こうとすると女の顔はすでに消えており、「それを誰とも確かめることができなかつた言いようのない悔恨から自分は目をさました（十一）」という内容だった。

このときの清顕が誰か確かめようとしたのは、指環の石に映る顔が自分のものではなかつたからであるが、この時点で清顕がジン・ジャンに転生する伏線はすでに張られている。

第二巻の飯沼勲が独房で見る夢では、よりはっきりとした輪郭を持つ伏線が登場する。

勲は自分の肉が明確な稜角を欠いたものになって、柔らかに揺蕩する肉になったのを感じた。やさしいだるい肉の霧で内部が充たされ、すべてがあいまいになり、どこを探しても秩序や体系は見当らず、つまり柱がなかった。かつて彼のまわりにきら渡って、たえず彼を魅していた光りの破片は消えてしまった。快さと不快、喜びと悲しみがどちらも石鹸のように滑り、肉がうっとり肉の風呂に漬っていた。

風呂は決して檻ではなかった。いつ出てもよいのだが、だるい快さのあまり出られないのだから、永久に漬っている状態、出てゆかない状態がすなわち「自由」だった。

(三十三)

勲は自分が女になった夢を「奇異で不快なので、追ひ払つても払つても、心の片隅に残っている」と形容している。夢の伏線は清顕の夢日記においては幻想的で曖昧だが、勲の夢では対象的に生々しく鬱屈としている。清顕と勲の夢の伏線の対象的な描写は、ジン・ジャンが登場するカウントダウンとして重要な意味を持っている。主人公たちの夢に現れる謎の女はジン・ジャンという二人の魂の系譜として『豊饒の海』第三部にして本篇について登場することになったのである。

受動的な少女のアイデンティティ

先に少し触れたが、ジン・ジャンが先の前世二人と最も異なるのは作品の語り部の役目を担っていない点である。『豊饒の海』で語り部を担当するのは、全巻登場する本多と、『春の雪』では松枝清顕、『奔馬』では飯沼勲、最後の第四部『天人五衰』の主人公・安永透といった具合に

男性の主人公のみである。そのため、女性に転生した時点で語り部の役目からヒロインとしての役割転換が成立する。『豊饒の海』四部作において女主人公の視点で書かれる箇所は殆どない。特に、ジン・ジャンにおいては彼女の視点で書かれる箇所はほぼ皆無である。ジン・ジャンが自分から能動的に他者に話しかけるのは、少女時代の次の場面のみだ。

菱川は甲高い声で訳した。

「本多先生！本多先生！何といふお懐しい！私はあるなにお世話になりながら、黙って死んだお詫びを申し上げたいと、足かけ八年といふもの、今日の再会を待ちこがれてきました。こんな姫の姿をしてゐるけれども、実は私は日本人だ。前世は日本で過ごしたから、日本こそ私の故郷だ。どうか本多先生、私を日本へ連れて帰って下さい」

(三)

バンパインの薔薇宮に監禁されていたジン・ジャンは、夢日記を頼りに王宮に訪れた本多に自分は勲であると訴える。ジン・ジャンは清顕と勲の転生でなければ答えられない質問に「澱みなく」次々と答えていくが、「全く無感動に、ただ思ひつくままの配列と謂つた具合」という様子である。これまでの二巻の夢の伏線とこの質問の応答の時点でジン・ジャンが転生者であることは明白だが、幼いジン・ジャンの返答は受動的で意思が感じられない。第二部で日本に留学生として訪れたジン・ジャンは本多と十三年ぶりに出会うが、ジン・ジャンには当時の記憶はほぼなかった。ジン・ジャンは次のような独白で薔薇宮に監禁されていた頃の自分について振り返っている。

「君は子供のころ、私のよく知つてゐた日本の青年の、生れ変りだと主張してゐて、本当の故郷は日本だ、早く日本へ帰りたい、と言つて、みんなを困らせてゐた。その日本へ来て、この指輪をはめたのは、君にとつても一つの大きな環を閉ぢることになるんだよ」

「さあ、わかりません」とジン・ジャンは何の感動もなしに答へた。「幼さい時のこと、私は何もおぼえてゐません。本当に何も！みんな私のことを、小さいときは気が変だつたとかからかふし、あなたと同じことを言つて、笑ひものにするのです。でも私、完全に何もおぼえてゐません。日本のことと云つたら、戦争がはじまると同時に、スイスに行き、そこで戦争がすむまでゐたのですが、誰かからもらつた日本のお人形を大事にしてゐただけです」

それは自分が送つたのだ、言はうとして、本多は差し控へた。「日本へ来たのは、お父さんに日本の学校がいいと教へられて、留学にきただけです。……もしかするとね。私、このごろ考へるのです。小さいころの私は、鏡のやうな子供で、人の心のなかにあるものを全部映すことができ、それを口に出して言つてゐたのではなにか、思ふのです。あなたが何か考へる、するとそれがみんな私の心に映る、そんな具合だつた、思ふのです。どうでせうか」

(三十)

ジン・ジャンが自ら評した「鏡」という受動的な性質は、先の前世である勲にはなかつた部分である。ジン・ジャンとは異なり、勲は前世である清頭の名残を色濃く残してゐた。清頭が「優雅」であることをアイデンティティとしていたように、勲にも「純粹」に死ぬという確固たる理想があつた。しかし、ジン・ジャンには前世の記憶をなくした時点に

おいても先の前世である二人のような確固たるアイデンティティは見受けれられない。ジン・ジャンは先の前世に共通してゐたかくあるべきという精神面の名残を継承してゐない。ジン・ジャンのアイデンティティとは、一体どのようなものなのだろうか。

創作ノートにおいて三島は、ジン・ジャンを「知的なものの感じられぬ肉の澄明」、「純粹な肉の結晶」と設定している。すなわち、ジン・ジャンは自らの器である「肉体」こそがアイデンティティなのである。精神性を重視した二人とは違い、先に挙げた勲の夢の認識そのままに肉体という肉の風呂に充足した美しい女として存在そのもので周囲を魅了する。それが月光姫と付けられたジン・ジャンの存在意義である。先の前世であつた勲の「純粹」に死ぬというアイデンティティの喪失から生まれた決して絶望しない、完全無欠の「純粹」な存在なのだ。

転生との再会、再び

ここからは、主人公の地位を譲り渡された本多繁邦が果たして実際に「行為者」に成り得たのかについて考えていく。

本多繁邦は、冒頭で少し触れたが、先の『春の雪』、『奔馬』においては、主人公の転生を見守る副主人公であり転生の「認識者」という立場に控えていた。しかし、『奔馬』の後半において、昭和神風連のクーデターに失敗し逮捕された飯沼勲の減刑のために弁護士に転職し奔走したことから「認識者兼行為者」という新しいスタイルを確立した。本多の主人公の地位について田中美代子は次のように述べている。

すでに、詩的なヒーローの死後の世界である。英雄は死に絶え、理想も志も喪われて、白々しい酔い覚めの朝を迎えた。ついに人

間理性」を代表する法律家・本多繁邦の出番がやってきたのである。

小説には必ず「人間の世界」が書かれていなければならない、それ以外に小説が宗教に対抗する方法はないから、と作者は言っていた。そこでこの巻では、「人間主義の世紀」の核心である「知性の運命」が組上にのせられる。すなわち本多自身がそれを体現して順当な人生を歩み社会的成功者となった。

〔三島由紀夫 神の影法師〕

田中が述べているように、幼馴染の綾倉聡子との禁忌の恋に殉じた清顕も、理想を挫かれ理想を守るために大人になることを拒否し、死を選んだ勲も既に退場し、本多以外に主人公の地位に着くべき人物は存在しない。本多は満を持して主人公の地位に着くことになった。

本多は今巻では第一部の昭和十六年から終戦においては、四十七歳から五十一歳、第二部の昭和二十七年においては五十八歳と初老の年齢に近づいている。第一部の本多は、清顕と勲の死によって、他人の救済を信じなくなり、逆にそれが弁護士としては有利に働いていた。前巻においても既に情熱は尽きていたものの、勲を救おうと「自分の最後の情熱」を注ぐ力は存在した。しかし、今回においては救済も信用しなくなり、さらに内面の荒廃が進んでいる。前巻までは「死に犯されたもの」という資質を、清顕と勲という共通する性質の人物と分け合う形であったが、その二人は既に亡く二人の荒廃をも担っている状態だった。

自らを勲と名乗るジン・ジャンと出会ったのは、その折であった。本多は、ジン・ジャンにいくつか前世についての質問をし、清顕が遺した夢日記と照らし合わせて清顕と勲の輪廻の影を見出す。しかし、ジン・

ジャンには「瞳が疲れるほどに、機を捕へてはそこへ視線を凝らした(五)」が、清顕と勲を通じての転生の証である脇の三つの黒子はなかった。前巻の転生した勲を見出した直後に証を見出したのとは対象的である。

ジン・ジャンに転生者の証を見出せなかった本多は、インドのベナレスの火葬場に赴き、至上を見出す。

インドでは、無情と見えるものの原因は、みな、秘し隠された、巨大な、怖ろしい喜悦につながつてゐた！本多はこのような喜悦を理解することを怖れた。しかし自分の目が、究極のものを見てしまつた以上、そこから二度と癒されなければらうと感じられた。あたかもベナレス全体が神聖な頼にかかつてゐて、本多のその視覚それ自体も、この不治の病に犯されたやうに

(八)

本多は、ベナレスの死体を燃やす火葬場で、清顕の墓参の折に墓石の下に清顕はいないと感じた戦慄の記憶と怖ろしい喜悦を見出す。帰国した本多はジン・ジャンという「美しい愛らしい一縷の謎(十八)」を頼りに唯識の世界へとめりこむようになる。内面の荒廃に支配された本多にとつて、ベナレスの死体が焼かれる光景は滅びと再生が共存した最も恐ろしい場所であった。しかし、同様に死と再生という転生の現象を眼にすることが出来る最も魅せられる場所でもあった。だからこそ本多は、清顕と勲の輪廻の影の存在であるジン・ジャンに救済を見出したのである。

第三章 行為者になろうとした認識者

ジン・ジャンへの恋慕

本多がジン・ジャンと再会したのは、昭和二十七年の五十八歳の折だった。先にも少し触れたが、成長したジン・ジャンは前世二人の記憶がなく幼い頃の記憶もおぼろげな状態であった。記憶を失ったジン・ジャンの態度に、本多はジン・ジャンが清顕と勲の転生の系譜ではないのではという疑問を持つ。記憶よりもたしか最大の転生の証である三つの黒子がジン・ジャンの幼少時には「瞳が疲れるほどに、機を捕へてはそこへ視線を凝らし（五）」でも存在しなかつたからである。本多はまだ前世の証を認識していない。

しかし、本多はまだ二人の転生の系譜であるという確証を捨てきれずにいた。本多のジン・ジャンに対しての願いは美しく成長したジン・ジャンの「一糸纏はぬ裸をすみずみまで眺」め、「ひとつひとつ嘗ての幼ない姿と照合したい」ということだった。ジン・ジャンが転生の系譜であるか否かという確証をつかむことが、本多のジン・ジャンへの恋においては不可欠であった。「恋を妨げるのは転生であり、情熱を妨げるのは輪廻」というように本多がジン・ジャンを愛するのに重要なのは、ジン・ジャンが二人の転生の系譜ではないと証明されることである。転生の系譜ではないただのジン・ジャンを愛することができれば、本多は不可思議な輪廻転生の不思議を見届ける「認識者」の役目から開放される。

しかし、清顕と勲の転生であると証明されたとしたら、本多は「認識者」としての役割を背負い続けねばならないからだ。本多は、ジン・

ジャンが清顕と勲の転生か否か自らの目で確かめることで「認識者」としての役目から解放たれようとした。しかし、ジン・ジャンの裸を見るために行動する行為は、皮肉にも本多がどこまでも「認識者」であることを裏付ける行為となつている。ジン・ジャンへの恋の行為は「認識者」としての役目から逃れられない宿命を身を持って証明していることに他ならない。「認識者」から開放への期待は、次の光景を目にしたことで潰えてしまう。

ジン・ジャンの腋はあらはになつた。左の乳首よりさらに左方、今まで腕に隠されていたところに、夕映えの残光を含んで暮れかかる空のやうな褐色の肌に、昂を思はせる三つのきはめて小さな黒子が歴々とあらはれてゐた。

(四十四)

本多はこのジン・ジャンと慶子の情事を自室の覗き穴で眼にする以前に、前段階として久松慶子の甥克己にジン・ジャンの処女を奪わせ、克己の口から黒子の存在を確認していたが半信半疑だった。自らの目で認識していないという状態では、情報にはなるものの確証には及ばなかつたからだ。幼少時にはなかつた黒子が大人になつて「歴々とあらわれていた」というのは些か唐突ではあるものの、転生の証である黒子を部屋覗き穴から自ら目撃することで転生の確固たる実証は得た。この瞬間、本多は突きつけられた二つの現実に落胆する。ひとつは、彼女の性的指向の点において本多は範疇外という現実、もうひとつは、本多はどこまでいっても「行為者」ではなく「認識者」であるという現実である。長年の望みであつた前世の証の「認識」は本多の「行為者」に成り

得る機会を見事に打ち砕いたのである。しかし、何故、本多がジン・ジャンを愛する上においてジン・ジャンが清顕と勲の転生であつてはならなかつたのだろうか。この問題についてもう一步踏み込んでいく。

再び認識者へ

本多のジン・ジャンの転生の証である「記憶」と三つの黒子の問題について考えていく行為は本多が「行為者」と成り得る機会、すなわち、清顕と聡子、勲と鬼頭楨子のように自らのアイデンティティと恋に生きた若者達のように生きる機会を失う原因となつた。

何故、本多にとつてジン・ジャンは清顕の生まれ変わりであつてはならなかつたのか。

本多はこれまでにおいて、『春の雪』では清顕と聡子の恋を外から見守り、『奔馬』では大阪控訴院の判事から転職して弁護士として勲の滅刑に奔走した主人公たちの生き方を見届ける証人であり、見るという行為を具現化した存在だ。本多がジン・ジャンを「もしジン・ジャンがはじめから、本多の見てきた一連の転生の流れと何の関りもない一個の少女であつたとしたら、これほど魅惑されることもなかつたにちがひない(三十二)」と清顕たちへの想いも含めて愛していることを自覚している、いくら本多が根底では清顕と勲の「行為者」としての生き方に憧れていても、本多は骨の髄まで浸み込んだ見ることを尊重する生き方を変えられない。認識を否定することは「認識の側からの反抗は、自殺に他なら(四十三)」ず、本多の「認識」というアイデンティティの崩壊を意味するからである。その結果、本多はどのような形でも己の意思を貫く「行為者」から再び見届ける「認識者」の立場に静かに戻っていく。

御殿場の火事から間もなく日本からタイに帰国したジン・ジャンは、帰国後コブラに囃まれ奇怪な死を遂げる。岡山典弘は、ジン・ジャンの死について「澄んだ笑ひ声」が聞こえたという視点に着目して、ジン・ジャンはあの時点で男神と逢つており、蛇神(コブラ)との交合の際に死を迎えたと述べているが、岡山の論に次のような解釈を加えたい。蛇神は実は死神で清顕と勲という死に犯された魂のジン・ジャンに蛇神が宿命として死を与えたというのでは飛躍し過ぎだろうか。本多がジン・ジャンへの失恋から認識者としての輪に戻つたのと同じく、ジン・ジャンもまた輪廻転生の逃れられない宿命に飲み込まれていく。意思を持たない肉の結晶であるジン・ジャンの最たるアイデンティティは、清顕、勲と続く輪廻の輪を先へ繋げること、すなわち「死」そのものだった。本多のジン・ジャンへの恋は片恋のまま終わりを迎えたが、互いに輪廻という宿命の輪に飲み込まれていく形において二人は同類だったのである。

清顕と勲の死によって、更なるデカダンスの深みに堕ちた本多はジン・ジャンと恋する「行為者」に成り得ようとすることで生の救済を得ようとしたものの「認識」というアイデンティティには抗えず、認識する行為によって救済を得る機会を放棄した。そして、愛する転生の系譜は蛇によって輪廻の輪へ還つて行つた。本多と三人の転生者の関係は、ギリシャ神話の吟遊詩人オルペウスと彼の妻エウリュディケの悲恋を彷彿とさせる。澁澤龍彦は、『春の雪』の綾倉聡子を「ウエヌス原型の一度に恋する女」、『奔馬』の勲の恋人鬼頭楨子を「デメテル原型の母親的な女」として「彼女たちが純粹な行動に赴く男たちにとって、邪魔な存在であることに変わりはない」とネガティブな存在として指摘しているが、ジン・ジャンにおいても同様のことがいえる。ジン・ジャンは自ら

転生の証と死で「認識者」としての宿命から逃れられないことを本多に認識させ、本多の精神をふたたび輪廻の夢と現の狭間に彷徨させた。ジン・ジャンは、澁澤の言葉を借りるならば、エウリュディケ原型の本多の生の救済の存在ではあるもののそれと同様に死を身に纏った女といえる。本多は、だからこそジン・ジャンに焦がれ、片恋の終局に燃え盛る炎の中ベナレスの再来を見た。別荘で練り広げられたベナレスの再来は、恋の終局と共に本多が「認識者」に還るという合図だったのだ。

第四章 考察

ジン・ジャンは意思としてのアイデンティティはないが、肉の結晶としての器そのものが確固たるアイデンティティであった。清顕と勲の二人のように内面の空虚に苛まれることもなく、充足し完成されている。しかし、二人の転生の系譜である以上その存在そのものが死に支配されている。それ故に転生の系譜からは逃れられず、予期せぬ死によって清顕と勲の輪廻の系譜に飲み込まれていく。一方、勲から主人公の座を受け継いだ本多繁邦はジン・ジャンに恋する行為者として行動しようとする。それは、清顕と聡子の恋を自分の行為として取り戻そうとする行為だった。しかし、それは片恋ゆえに失敗に終わり、ジン・ジャンへの失恋とジン・ジャンの死によって再び傍観者へと戻っていく。『暁の寺』は認識者としての立場から解放たれようとした本多の最後の現実においての情熱を取り戻そうとする挑戦の物語としても読み解くことができる。「認識者」へと戻った本多とともに『天人五衰』へと物語は終局に向かっていく。

注

- (1) 大森郁之助「春子」と『暁の寺』の間の虚空：三島由紀夫の lesbianism の位相についての一仮説（札幌大学女子短期大学部紀要21、一九九三—三）
- (2) 田崎英明「オリエンタリズム—「春の雪」「奔馬」「暁の寺」「天人五衰」(国文学) 解釈と教材の研究 一九九一—五」
- (3) 柴田勝二『暁の寺』と唯識論—『豊饒の海』への視角（日本近代文学60）、一九九一—五）
- (4) 武内佳代「レズビアン表象の彼方に—三島由紀夫『暁の寺』を読む（人間文化創成科学論叢10、二〇〇七）
- (5) 久保田裕子『暁の寺』における〈日本〉と〈アジア〉表象—（ポスト）／コロナムの可能性（有元伸子・久保田裕子『21世紀の三島由紀夫』翰林書房、二〇一五）
- (6) 井上隆史『もう一つの日本』を求めて…三島由紀夫『豊饒の海』を読み直す（いま読む！名著）（現代書館、二〇一八）
- (7) 『決定版三島由紀夫全集14』（新潮社、二〇〇二）
- (8) 田中美代子『三島由紀夫 神の影法師』（新潮社、二〇〇六）
- (9) 井上隆史『三島由紀夫虚無の光と闇—三島由紀夫論集』（試論社、二〇〇六）
- (10) 岡山典弘『三島由紀夫の源流』（新典社、二〇一六）
- (11) 澁澤龍彦『三島由紀夫おぼえがき』（中公文庫、一九八七）

※本稿での『春の雪』『奔馬』の引用はすべて『決定版三島由紀夫全集13』（新潮社、二〇〇一）、『暁の寺』の引用はすべて『決定版三島由紀夫全集14』（新潮社、二〇〇二）に拠った。